



日光山 輪王寺 [日光山 輪王寺の成り立ち]

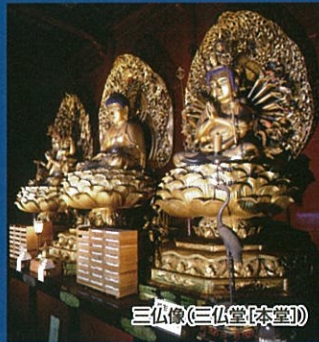
奈良時代～平安時代

奈良時代の末、「勝道上人」により『四本龍寺』が建立され、日光(二荒)権現が祀られ、日光山が開山されました。平安時代になると真言宗宗祖の「空海」や天台宗の高僧「円仁(慈覚大師)」らの来山が伝えられています。「円仁」は848(嘉祥元)年に来山し、『三仏堂・常行堂・法華堂』を創建したとされ、この頃から輪王寺は天台宗寺院として歩み始めます。(※現存するこれらのお堂は、いずれも近世の再建)。『常行堂・法華堂』という修行の為の堂を2つ並べる形式は天台宗特有のもので、かつては寛永寺[東京・上野]などにもありましたが、現存するのは延暦寺[比叡山]と日光山のみといわれています。



鎌倉時代

鎌倉時代には将軍家の帰依篤く、鎌倉将軍の護持僧として仕える僧侶が輩出されます。この頃には神仏習合が進展し、三山(男体山・女峰山・太郎山)、三仏(千手観音・阿弥陀如来・馬頭観音)、三社(新宮・滝尾・本宮)を同一視する考えが整い、山岳修行修験道(山伏/やまぶし)が盛んになります。



室町時代

室町時代には、所領十八万石、500におよぶ僧坊が建ちならび、その隆盛を極めます。しかしその後輪王寺は1590(天正18)年、豊臣秀吉の小田原攻めの際、北条氏側に加担したため寺領を没収され、一時衰退します。

江戸時代

江戸時代に入り、天台宗の高僧「天海」が貫主(住職)となってから復興が進み、1617(元和3)年には徳川家康公の霊を神として祀る「東照宮」が創建されました。(※現在の東照宮社殿はこの時のものではなく、20年後に徳川3代将軍「家光公」により建て替えられたものです)。1653(承応2)年には「家光公」の霊廟である大猷院(たいゆういん)が創建されました。その翌々年1655(明暦元)年には後水尾上皇の院宣により『輪王寺』の寺号が下賜され(※それまでの寺号は平安時代の嵯峨天皇から下賜された「満願寺」、後水尾天皇の第3皇子・守澄法親王が入寺されました。以後、輪王寺の住持は法親王(※親王宣下を受け、出家した皇族男子)が務めることとなり、関東に常時在住の皇族として『輪王寺門跡』あるいは『輪王寺宮』と称されるようになりました。寛永寺門跡と天台座主を兼務したため「三山管領宮」とも言われます。輪王寺宮は輪王寺と江戸上野の輪王寺及び寛永寺(徳川将軍家の菩提寺)の住持を兼ね比叡山、日光、上野のすべてを管轄して巨大な権威をもっていました。



明治時代

1871(明治4)年に神仏分離令が發布されると、それまで「日光山」として一体であったものが二荒山神社、東照宮、輪王寺にそれぞれ分離されて二社一寺となりました。現在、輪王寺に属する建物が1箇所にとまっておらず、日光山内の各所に点在しているのは、このような事情があったからです。

現在

1999(平成11)年12月、輪王寺38棟、東照宮40棟、二荒山神社23棟、その他2棟、合計103棟からなる『日光の社寺』が日本で10番目となる「世界遺産」に登録されました。

